文教民生常任委員会 三重県四日市市視察概要

四日市市三重西地区は、人口 5,008 人、1,977 世帯、17 自治会からなる。この地区を形成する三重団地は建設以来 40 年を経過し、当初の入居メンバーのほとんどがそのまま高齢期をむかえた。高齢化率は 37.7%で、ほとんどが核家族・単身家族である。

この状況の中、平成 23 年度に三重西連合自治会に高齢者対策を目的とするシニア部が創設された。また、平成 24 年 4 月に「社会福祉法人青山里会」が高齢者孤立化防止拠点である「いきいき安心生活館ぬくみ」を開設した。「いきいき安心生活館ぬくみ」は、高齢者の健康につながる食事を提供する施設で、憩いの場所となっている。驚くことに、利用者の半数が 70 歳以上の男性である。これを機会に、住民が自主的にサービスを提供する「ライフサポート三重西」を始めることになった。自らが自らの生活を守り、顔の見える人間関係をつくり、放置死を防ぎたいという目的で始まった。

サービス希望者は原則 65 歳以上の高齢者とし、年会費 2 千円とした。現在では、190 世帯加入されている。サービス内容は訪問型サービスで、ゴミ出し・庭掃除・「ぬくみ」の出前・買物送迎・話し相手・緊急時補助・通院付添い等である。また、サービス料金は、概ね 1 時間 600 円としている。サービス提供料の 9 割をサービス提供者に渡し、1 割を事業の運営費としている。平成 27 年度は、サービス提供件数が 665 件で 316,150 円の売上となっている。サービスの必要性が数字に表れている。しかし、サービスが始まって 4・5 年が経っているため、サービス提供者の後継者不足が課題となっている。

平成 25 年 3 月から始めてきたこの訪問型サービスが、四日市市が平成 29 年 4 月から移行しようと考えている地域包括ケアシステムの住民主体の訪問型サービス B にあたる。そこで、住民主体の通所型サービス B にも取り組んで行くことにした。実現したい通所型サービスは、廃用症候群を防ぎ、要介護状態にならないことを目的とし、週 5 回、健康づくり体操や講座を主とした内容で考えている。介護予防を真剣に考えるなら、現在の介護保険予防デイサービスのような週 1～2 回のペースではなく、日常的に、また週 2 回以上は、通っていただきたいという思いがある。これから実現に向けて、行政からの積極的な収入面での支援の必要性と事故等の責任体制が課題となっている。

一方で、介護が必要になった時の在宅生活を支える拠点の需要が高まり、四日市市と「社会福祉法人青山里会」に対して、小規模多機能型居宅支援事業所の建設の請願を行った。努力の甲斐あって、平成 28 年 4 月に、「社会福祉法人青山里会」が「コミュニティケアホーム三重西」を開設した。

以上のように、この地域には、介護予防・生活支援・交流の場としての「ライフサポート三重西」、および、コミュニティレストラン・総合相談・交流の場としての「いきいき安心生活館ぬくみ」、また、介護が必要になった時には「コミュニティケアホーム三重西」がある。「ライフサポート三重西」は住民が主体のものであり、「いきいき安心生活館ぬくみ」と「コミュニティケアホーム三重西」は社会福祉法人が行っている。つまり、この地域では、「住民」と「社会福祉法人」の連携と協働で、地域包括ケアシステム構築をめざしている。

文教民生常任委員会 長野県塩尻市視察概要

人口約６万７千人の塩尻市は、商店の数や人口減少に歯止めがかからない状況にある中、平成 11 年度に中心市街地活性化基本計画を策定し、対策に取り組んできた。しかし、その効果は十分でなかったことから、平成 15 年度に、市民公募による中心市街地活性化ワーキンググループ、図書館ワーキンググループを設立した。中心市街地活性化グループからは、当時、大型店舗があった反対側に市民が交流できる複合施設を作ってはといった提案があった。一方、図書館ワーキンググループからも、市役所の隣にある総合文化センターにあった図書館が施設の３階にあることや手狭なことから、大きな図書館が欲しいとの提案があった。これらの提言によって、人気があり、集客力のある図書館を核とした市民交流の場の設立へと動き出した。

建築構想や基本設計は、図書館施設、子育て支援施設、シニア施設、市民活動施設、ビジネス支援施設の専門部会から構成される市民交流センター創造会議によって協議され、策定された。また、センターの組織や事業、財政などの運営方針についても検討を重ね、平成 20 年５月に運営管理方針を策定した。

こうした中、専門家や多くの市民の意見を取り入れた市民交流センター（えんぱーく）は、平成 20 年 12 月に着工、平成 22 年７月にオープンした。

市民交流センターは、市民活動の中から日々進化し、豊富な情報の拠点、知恵や地域にある新たな価値の蓄積と活用、新たに創造と発信を目指している。そして、これらの役割と実現に向けて、ビジネス支援分野、子育て支援・青少年育成分野、図書館分野、シニア対象分野、市民活動等支援分野の５つの分野を備えている。

建物は、地上５階、地下１階からなる。１階は図書館をはじめ子育て支援センターなど日常的に市民が使える施設が備わっている。図書館は２階にも続き、総合案内所や会議室、フリーコミュニティなど、より実際に活動する場として利用できる設備が備わっている。３階には学習室、市民サロン、食育室、音楽練習室など市民活動の中心となる施設が備わっている。４階は職業相談室や商業や工業などまちづくり部門を設置し、ビジネスにおけるあらゆる場面を支援するためのセクションが備わっている。５階ではイベントホールがあり、行事後の懇親会などに利用されている。また、民間オフィスや展望広場もある。

センターは設計段階からいくつかの特徴を持って建設されている。吹き抜けやガラス張りの構造で外から光が入り、明るく周囲からも中の様子を見ることができる。内部もオープンな空間が連続し、どこに居ても開放感を味わうことができる。施設内は、「壁柱」と呼ばれる薄い板状の壁が点在し、公園の林の中を歩くような雰囲気を与える。フロアのいたるところにテーブルや椅子が置いてあり、飲食ができるほか電源も使用できる。

オープンから６年３カ月経過し、入館者数が 400 万人を超えた。年間 65 万人程度の利用があり、利用者の約６割が市民であるが、市外からの利用者も多い。向かいには市営の立体駐車場があり、遠方からでも車で来館できる。土日も開館しており、イベントや行事も多く開催されている。また、住民票や税証明も発行している。

センター「えんぱーく」の名称は、「まるい」、「ご縁」、塩尻の「塩」という意味があり、その名称にも愛着がある。多くの方が訪れるセンターでありながら、周辺地域の活性化にはまだまだ十分でない。オープンから７年が経過し、社会情勢も変化していく中、センターの将来展望についての議論が今後、進められる。